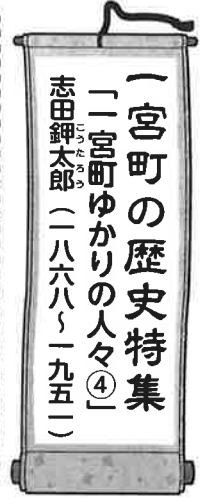


平成28年10月号



「一宮町ゆかりの人々」第4回は「志田 鉦太郎」を紹介しします。

志田 鉦太郎は明治元年（1868）、東京で生まれました。明治27年（1894）、帝国大学（現東京大学）法科大学卒業後、大学院に進学、在学中に保険学会を創立するなど「保険学」の分野で積極的に活動しました。

その後、学習院大学科教授、東京帝国大学法科大学教授などを歴任、大正9年（1920）には明治大学教授に就任するなど、法学者として活躍しました。明治末期には商法（商人の営業、商行為に関する法律）編纂のために清国（中国）に招かれました。

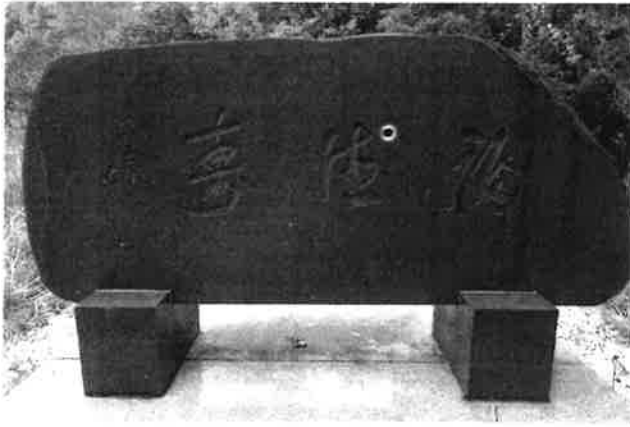
鉦太郎が一宮と関係を持つようになったのは、明治38年（1905）に一宮に別荘を建ててからです。翌年には本籍も移しています（昭和10年に東京小石川へ移転）。別荘があった場所は現在の創作の里の上の山で、現在石碑が建っています。創作の里を含めた一帯が、志田氏の別荘でした。昭和7年（1933）の「松井天山鳥瞰図」に

も描かれています。

大正14年（1925）には私立一宮実業学校（現一宮商業高等学校）の初代校長に就任、昭和11年（1936）までその職を務めていました。

昭和15年（1940）明治大学の第5代総長に就任、戦中の厳しい情勢の中、約3年間その任を全うしました。

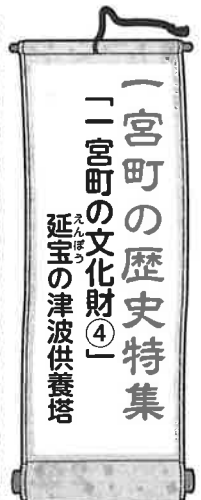
昭和26年（1951）、82歳で死去しました。一宮の自宅に埋葬されましたが、昭和55年（1972）に自宅跡地が一宮町に寄贈されるに伴い、遺骨は町営墓地（宮の森霊園）に移されました。



▲ 志田家別荘跡地に建つ石碑（創作の里・裏山）

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

平成28年11月号



「一宮町の文化財」第4回は「延宝の津波供養塔」を紹介しします。

江戸時代、九十九里沿岸は度々津波に襲われました。町内にも多くの資料やその痕跡が残されています。その一つが今回紹介する町指定文化財の「延宝の津波供養塔」です。

延宝5年（1677）、房総半島東方沖付近でM8とも推定される大地震が発生、東北から房総・伊豆、さらには尾張（現愛知県）まで、津波に襲われました。東浪見地区では6mもの津波が押し寄せたと推定されています。家屋は流され、田畑は砂浜と化し、船も地曳網も残さず流され、復旧に5年から15年を費やしたと伝えられています。

この供養塔は、津波から17年が経った元禄7年



▲ 延宝の津波供養塔（新熊集会所前）

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416

（1694）に犠牲者の供養のために建てられたものです。表には観音菩薩像が彫られ、「十万万返 成就 施主 一四三人内 男七十人 女七三人」と刻まれています。東浪見地区に残された古文書には52軒の家が流され、男子ども137人が亡くなったと記されています。数字に誤差はありますが、東浪見地区だけで150人近い犠牲者が出たことがわかります。

この供養塔は犠牲者への祈りだけでなく、後世への教訓のために建てられたのでしよう。私たちはこの教訓を、また次の世代へ、伝えていかなければなりません。